



ふるさと

徳永 武

熊本で生れ、育ち、学校卒業後長い間
県外に生活していると、年を経たせい
無性になつたかしくなり、また帰りたく
なるのはふるさとではなからうか。

ふるさとは若い日の数々の思い出が
多い、そしてその時の形、姿が変わって
いる。つまり全容を変えていることもあ
り、形は変わらなくとも年代を経て古く
なり、その周囲も変わっている。熊本で育ち
永住している人などには味わえない特権
かもしれない。

その一つに立田山が小さくなり変貌し
ている。
私が小学校の頃、十二月三十一日大晦
日零時を期して書初めをして兄と二人で
提灯と俵切れを持ち笹道を踏み分けなが

ら(当時立田山は細川家の御料林で禁猟
区だった)椎、樺、杉、松等の大木と雑
灌木の間を登り抜けてや々と辿り着く
が目的の豊国神社。
立田山の頂上よりやや下った処でウツ
ソウたる森の中の平面広場約千坪位の
中央に昔は神社の建物があったのが、幾
度の戦災で焼け、いまは祠の跡に石ころ
が無造作に積み上げられ、その石の間か
ら数十本の樹が突き出ていた。いつの頃
からか脳の神様として白や赤い寄進の旗
がぶら下り、その木の枝に信者のもので
あろう女の長い頭髪が幾本かぶら下つ
ていた。

真暗い森の中の深夜で明りは手持ちの
提灯だ一つ、他には誰もいない。ただ
恐ろしくてガタガタと身ぶるいがとまら
ず、明け行く正月の楽しみと戦慄とのな
かで頭を下げて逃げるようにして山を降
りたことがあった。

つまり私の生地は拝聖庵近くで、昔細
川時代の遊園地がその庭で茶会の野点が
催されたときいている。立田山のすぐ麓
でいまは相当荒れているが楓、桜、つづ
じの名所でもあり、昔の立派な庭園のた
たずまいが偲ばれた。

大正から昭和の初年にかけて熊本市の
上水道工事が始まり、立田山の南西側中
腹に八景の水谷の湧水を引き上げ貯水し
て浄化の上、市内に配水する作業が始つ
た。送水用大鑄管が持ち込まれ、工事々
務所や工用機具がわれわれの遊び場を
封じてしまった。また中腹の貯水池に通
ずる運搬用トロッコ道が山の斜面の樹木

を切り倒して造られた。遊び場をとられ
てもこども心には水道のありがたさも無
関心だった。そして中学の三年頃には完
成した。

以来、高等学校を卒業したきり県外に
出て生活し三十七年ぶりに熊本で暮らす
ようになった。子供の時の遊び場だった
立田山も全くのハゲ山となり、なんと
昔の面影より小さくなったような気が
してならない。

世相の近代化につれて増大した宅地の
開発と自然保護のバランスはくずれつ
つある。
ふるさとに対する形而上の夢や幻を描
く楽しみがなくなりつつある。

森の都熊本では、特に早くから市街化
調整区域指定や宅地造成の規制区域の指
定などの行政措置を題目の飾り物でな
く強力に実施しなければならぬのでは
なからうか。

一日も早く緑の自然保護と開発の調和
点を見出してほしいと思う。
(熊本放送報道制作局長)

バラ

柴田 史

もう二、三年も前になるある日、バラ
が好きだと言った私に、数種類の苗木を
分けてくれた友人がいる。ふだん無口な
彼は、バラのことなど、ついぞ口にした
ことはなかった。かなり栽培してい

が最も古いと聞くと、何百年になるの
か、つまびらには知らないけれど、わ
が郷土肥後にはそんな伝統があった訳で
はなかった。
私の知る限りでは、八代の木彫家橋本
敦喜氏が、戦前に、手すきび風に試作し
ておられたようで、後にも見せていた
いたことがある。

初めは医者にするつもりを、この
道に入れたのは画家の父であって、それ
は戦後、満州から引揚げてきて窮迫の身
を、林産地、人吉市に寄せたのを機に、
何とかこの木材を生かす仕事を……
と、かつて山本鼎(かなえ)氏が提唱
した信州の農民美術運動を理想におい
て、父の発想によるものであって、私自
身は気乗りのする話ではなかった。なに
しろ、不器用で、松も杉も見分けはつか
ず、刃物なんぞ子供のときの「肥後守」
しか知らないものであった。父にしても似
たようなもので、仕方がないから、二人
で小刀の研ぎ方から研究せねばならぬ始
末、全くの独学であった。

そもそも、一刀彫の名の由来は、「一
刀一刀に心をこめて彫るから」とも、
又、「小刀一本、すなわち一刀しか用い
ずに彫るから」とも、いうけれど、私た
ちは「一刀のみをもつて彫る」ことに妙
味ありとしたから、まず、小刀が切れな
くては話にならず、そのためには研ぎが
出来なくてはならぬ。ところが、これが
難しい何の、俗に、「研ぎに三年」と

いうくらいのものである。
研ぎも難しいが、一刀で彫ることは更
に難しい。それも私たちの直(じか)
彫、つまり下絵なしに彫ってゆく方法
だ。父はさすが、デッサンができてい
るからいいが、私の方は四苦八苦、それ
もやっとならぬ。何日かかかって彫り上
げた。女の子守姿。するとそこへふらりと遊び
に見えた、いまは故人の作家、小山勝清
氏、それをつまみ上げて掌(てのひら)
にのせて、「ふーん、こらあよか。ああ
たはよ素質のある。こるばずーと。
おやり」。「それからの武蔵」を書かれ
る前で、別髪して出家姿であった。思わ
ぬほめられようで半信半疑のその翌日、
今度は買い手がついた。ロイヤル文学者
の上藤進氏(故人)。思えばそれが幸か不
幸か今日までとうとう(刀刀で)、苦勞
する仕儀になった。同じ頃、陶芸家村
山一壺氏も毎日顔を見せて、氏はしきり
にやきものをやれ、助手になれ、と誘れ
た。大いに魅力があったが、「何年かか
りますか」と尋ねると、まあ、二十年だ
な、との返事、一家の柱だった私は経済
的に無理であった。二十年とは気の遠く
なる思いがしたが、もう、二十三年も過
ぎてしまった。後に私が「一光」と号す
るようになった。世間では、一壺先生と
私とをよく混同して、敬愛する先生
の余徳を私は蒙っているようなものだ
が、その分だけ、やはり私はお年寄りだ
と思われてしまうのである。
(木彫家)

わが一刀彫由来

村上 一光

私が一刀彫を始めたのは、十七歳のと
き。もう二十三年にもなる。指折り数え
てみてふーっと溜息ついて、いささか感
概を催すのである。
どういうものか、未知の人は私を老人
だと思ひ込んでおられることが多い。ほ
んど例外なしにそうであった。一刀彫
という名称からは古風なイメージを受
けとり、伝統的な、そんな古い仕事にた
ずさわる人は時代おくれの、白いヒゲで
もたくわえていそうな老人だ、と、思う
のであろう。五、六年も前のこと、県庁
の関係筋の課長さんに挨拶をした。名刺
を出すと、ああ、一刀彫の……、と合点
をして、お父さんはお元気か?とか何と
か、お父さんは、の連発なのである。「
あー、私がその本人なのですが……」
「えっ? ああ、あなたが、あ、一光さんで
すか?」絶句したきり、私の顔と名刺
とを交互に見比べて、何とも不思議そう
なのが可笑しくもあり、気の毒でもあつ
た。そんなことは、しょっちゅうなか
る。

一刀彫はもともと奈良時代、春日神社
の神事に奉納していた奈良人形(能人形)

ることなど、知る由もなかったが、その
彼が、バラの話となると熱を帯びるの
か、ポツポツと自分から話すのだった。
その時、彼は「花は、まだおしいナノと
思うころ捨ててほしい」と、申しわたす
ようにつけくわえた。私は、彼がいかに
花を「愛し」ているかを知り、単に好き
だと言った自分が恥かしく思えてならな
かった。

一体、私は本当に何かを「愛し」たこ
とがあるのだろうか。自分では常に何事
にも嘘のない気持で接しているつもりな
のだが、相手となるものの心の動きまで
は、読みとるゆとりも、眼力もないま
ま、外観だけにとらわれて、「好きだ、
嫌いだ」と、ずいぶん一人よがりののはた
迷惑なことを、言ったり、したりしてい
るのではないのだろうか。

春になってバラは賑やかに咲いた。以
前植木市で求めた数本も含めて、真紅、
純白、黄、桃色、そして、ハワイとかい
う種類なのである。朱、等々。極めて狭
い庭であっても、それは私にとって安ら
ぎの園であった。

しかし、そのバラも秋には三、四本を
残して枯れてしまった。否、私が枯らし
たのである。見事に咲いてくれたバラ達
へ、愛のおもいをこめながら、もつと大
きくなれよ、もつと多くの花を咲かせ
よ、と、肥料を与えたのだったが、それ
が結果的に枯らす原因となった。

油粕を腐らせて、それを薄くして与え
ればよいとか、少々ならばそのままでも
よからうとか、そんな話を鵜呑にして、
研ぎも難しいが、一刀で彫ることは更
に難しい。それも私たちの直(じか)
彫、つまり下絵なしに彫ってゆく方法
だ。父はさすが、デッサンができてい
るからいいが、私の方は四苦八苦、それ
もやっとならぬ。何日かかかって彫り上
げた。女の子守姿。するとそこへふらりと遊び
に見えた、いまは故人の作家、小山勝清
氏、それをつまみ上げて掌(てのひら)
にのせて、「ふーん、こらあよか。ああ
たはよ素質のある。こるばずーと。
おやり」。「それからの武蔵」を書かれ
る前で、別髪して出家姿であった。思わ
ぬほめられようで半信半疑のその翌日、
今度は買い手がついた。ロイヤル文学者
の上藤進氏(故人)。思えばそれが幸か不
幸か今日までとうとう(刀刀で)、苦勞
する仕儀になった。同じ頃、陶芸家村
山一壺氏も毎日顔を見せて、氏はしきり
にやきものをやれ、助手になれ、と誘れ
た。大いに魅力があったが、「何年かか
りますか」と尋ねると、まあ、二十年だ
な、との返事、一家の柱だった私は経済
的に無理であった。二十年とは気の遠く
なる思いがしたが、もう、二十三年も過
ぎてしまった。後に私が「一光」と号す
るようになった。世間では、一壺先生と
私とをよく混同して、敬愛する先生
の余徳を私は蒙っているようなものだ
が、その分だけ、やはり私はお年寄りだ
と思われてしまうのである。
(木彫家)

根元から一尺程離れた浅い溝に、ほんの
僅か、そのままの油粕をほどこした。
だが、私がバラのまわりに掘った溝
は、はたして一尺離れていたろうか。本
当に肥料は僅かであつたらうか。あまり
離れすぎるとはなにかと加減し、もう
少し多い方がききめがあるのではないか
と思つたりはしなかつたか。
私の一方的、しかも過つた愛情のため
に、こよなく愛したバラは色を失いつつ
つ、しだいに弱っていったのである。泡
を食った私は、どんだん水を掛けてはみ
たが、もはやそれはおよばぬ事であつた
た。

バラには花のもちがいいのと、悪いの
があつて、はやいのは朝の蕾が昼にはも
う開きすぎ、リボンをむんだように花び
らがめくれ、翌日には散ってゆく。ゴー
ルデンセプターとかいう黄色い花がそれ
だ。薫りも有ると無いのとがあつて、
真紅のバラは花びらも多く薫りも高い。
私は、その真紅の一枝を「利休の朝顔」
よろしく花瓶にあげた。黒い器に、白い
土壁が一段と花をひきたたせ、花自身も
また、誇らしげにみえた。

幾日か過ぎて、私は彼の言葉を思いな
がらも、捨てるのを一日延ばしにしてい
るうち、花びらの一枚が落ちた。やはり
時期がおくれたかと、いくらかのうしろ
めたさをいだきながら、そつとバラに手
をふれた。するとバラはたちまちに花び
らを落とした。それはあたかも、こらえ
ていた悲しみが一時にあふれた風情であ